

[課題演習報告]

高等学校国語科におけるキャリアデザイン力の育成に関する研究 ーコンピテンシーベースの単元開発を通してー

宮 原 優 子

Yuko MIYAHARA

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻スクールリーダーシップ開発コース
教科教育リーダープログラム
福岡県立朝倉東高等学校

(2024 年 1 月 10 日受理)

本研究は、高等学校国語科という教科の視点からキャリア教育にアプローチするための取組を通して、教科の中のキャリア教育の在り方を究明することを目的とした。そのために、県内の先進校の視察をはじめ、先行研究や事例研究を用いて教員が授業を構成するにあたってキャリア教育の視点を取り入れるための手立てと、生徒のキャリア教育に係る力を授業内で育成するための手立ての双方から授業モデルを作成した。「単元構想表」はその過程で教員が授業を構成するために用いたツールである。

その結果、生徒のキャリアデザイン力の向上が見られ、キャリア教育の視点を取り入れた授業の実践が可能になるとともに、「単元構想表」によって授業内のキャリア教育の焦点化の可能となった。また、複数の教員による授業に関する協議にも「単元構想表」が有効に作用することが明らかになった。

キーワード：キャリア教育, 高等学校, 国語科, 単元開発, 単元構想表

1 主題設定の理由

(1) 社会の要請から

高等学校はこれまで生徒や社会の多様なニーズに応えるため、多様な教育を行うことができるよう、様々な学科や課程を設けてきた。普通科、専門学科、総合学科の3つに分類される学科を比較すると、文部科学省(2021)のデータ1)では、高等学校の学科別生徒数は73.3%が普通科に在籍しており、普通科が多くを占める状況となっている。このような現状を踏まえ、令和3年1月の中央教育審議会答申では新時代に対応した高等学校教育等の在り方について、高校生の学習意欲を喚起し、可能性及び能力を最大限に伸長するための各高等学校の特色化・魅力化や、教科等横断的な学習の推進による資質・能力の育成を行うために「普通教育を主とする学科の弾力化(普通科改革)や教科等横断的な学習の推進による資質・能

力の育成を実現する」方策の一つとして普通科改革支援事業が提言された。

また、平成23年1月中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」3)では、高等学校進学者の中には、将来の生き方・働き方について考え、選択・決定することを先送りする傾向が強いことが指摘されている。

(2) 在籍校の実態から

在籍校である福岡県立朝倉東高等学校はビジネス科と普通科の2学科から構成されており、各科が特色を活かしながら生徒が互いに刺激し合い高め合うことができる環境が整っている。しかし近隣に朝倉高校、朝倉光陽高校など普通科を持つ高校があることを踏まえると、本校の普通科をいかに魅力のあるものにするかが急務である。

本校の場合、高等学校普通科における特色化を推進する論点として、キャリア教育がある。具体的にはコロナ禍における体験活動の不足である

が、実際には職場体験等の活動に依存したキャリア教育であったことが課題として考えられる。日々の教育活動全般を通しての体系的なキャリア教育の実施が必要である。さらに、キャリア教育を中心としたカリキュラム開発が実施されておらず、進学や就職のための進路指導に終始している点も課題である。以上のことから、在籍校の普通科を特色化することと、キャリア教育の研究は双方に関係している喫緊の課題であると考えた。

(3) 1年次の研究の概要

令和3年1月の中央教育審議会答申では新時代に対応した高等学校教育等の在り方について、高校生の学習意欲を喚起し、可能性及び能力を最大限に伸長するための各高等学校の特色化・魅力化や、教科等横断的な学習の推進による資質・能力の育成を行うために「普通教育を主とする学科の弾力化（普通科改革）や教科等横断的な学習の推進による資質・能力の育成を実現する」方策の一つとして普通科改革支援事業が提言された。そのような状況において在籍校である福岡県立朝倉東高等学校（以下「本校」と略記）も同様に普通科の特色化を目指しており、特色化を推進する論点として、キャリア教育を置いている。キャリア教育は全国的にも研究されてきた分野であるが、どの学校や生徒にも当てはまる模範的なキャリア教育があるわけではない。本校においても、生徒や地域社会の現状に合ったキャリア教育を追究する必要がある。

1年次の研究では実態調査を行い、本校生徒の現状とキャリア教育の成果と課題を確認した。さらに公開授業週間において、キャリアデザイン力尺度における「リーダーシップ力」の育成を目指した授業の実践を行い、教科の単元開発や授業開発の必要性について本校教員と意見交換を行った。

2 研究主題・副題の意味

(1) 「キャリアデザイン力」とは

平成23年1月に中央教育審議会から出されたこれからのキャリア教育において身につけることが求められている「基礎的・汎用的能力」を、三川ら(2013)が分類したものの総称である。「基礎的・汎用的能力」は「人間関係形成・社会形成能力」「自己管理・自己理解能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の4つの能力から成り立つものとされている。これらの力の育成を目指すことが、キャリア教育の充実と在籍校普通科の特色化につながると考える。

(2) 「コンピテンシーベース」とは

これまで高等学校の国語科においては、「何を学ぶか」や「どの作品を学ぶか」といったコンテンツベースの授業展開を主軸とした学習指導がなされていた。しかし高等学校新学習指導要領(平成30年度改訂版)によって、従来のコンテンツベースの授業では生徒が将来、多様な社会の変化に十分に対応できないとし、学んだ知識や身に付けた技能を活用して「何ができるか」を問う「コンピテンシーベース」の授業展開の必要性を提示した。

現在、学習指導要領の実施に伴い、本校では1年生と2年生において新学習指導要領に基づく学習指導が行われているが、複数教材の選定や新しい授業スタイルの実践を十分に実施できていないのが現状である。今後、本校普通科の授業内容がさらに充実したものになっていくことが予想される中で、本校の特色を授業に反映させていくためにはコンピテンシーベースの授業実践事例をより多く追究していくことが必要であると考えます。

(3) 「単元開発」とは

「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」(平成29年12月21日中央教育審議会)では、単元等のまとまりを見通した学びの実現のための方策として、「主体的・対話的で深い学びは、1単位時間の授業の中で全てが実現されるものではない」と述べており、「各学校の取組が、毎回の授業の改善という視点を超えて、単元や題材のまとまりの中で、指導内容のつながりを意識しながら重点化していけるような、効果的な単元の開発や課題の設定に関する研究に向かうものとなるよう、単元等のまとまりを見通した学びの重要性や、評価の場面との関係などについて、総則などを通じて分かりやすく示していく」べきであると示している。これまでは1時間の授業の中で可能な限り多くの学びを実現するために手立ての充実が図られていた。これは単元という大きなまとまりとして授業を実施するという考え方がこれまでの教育現場に定着して来なかったことが原因であると考えます。1時間毎の小さなまとまりの中での授業開発から脱却し、単元という大きなまとまりの中で学習を設計するという単元開発を実施することで、教科の視点からのキャリア教育の実現を目指す。

本研究では「単元開発」に着目し、従来の授業開発方法を見直し、「単元開発」を用いた授業開発を行い、同時に生徒のキャリアデザイン力の向

上につながる授業内の手立ての考案及び実施に繋げる。

3 研究の目的

本研究は、高等学校国語科におけるキャリア教育に焦点を当てる。国語科の授業開発を単元開発の段階からキャリア教育の視点を取り入れて設計し、実践と検証・分析を行い、教科におけるキャリア教育の在り方を究明する。

4 研究の仮説

コンピテンシーベースの単元開発を実践することで、本校のキャリア教育における生徒の課題を国語科の授業の面から克服するための単元設計の在り方が明らかになるだろう。

5 仮説説明のための具体的方策

- (1) 生徒の実態把握について
 - ①実態調査のための尺度と対象の決定
 - ②第1回実態調査の概要
 - ③第1回実態調査の分析
- (2) 県内先進校の実践事例調査について
- (3) キャリアデザイン力育成のための授業実践
 - ①単元構想表を用いた単元開発
 - ②授業内手立ての実践Ⅰ
 - ③授業内手立ての実践Ⅱ

6 研究の実際

- (1) 生徒の実態調査について
 - ①実態調査のための尺度と対象の決定

「改訂版キャリアデザイン力尺度（高校生版）」をもとに、生徒のキャリア形成に関する実態を調査する。キャリアデザイン尺度（高校生版）は、教育活動全体を通して系統的なキャリア教育を評価し改善することを目的としている。高校生のキャリアデザインの能力を「社会形成力」「リーダーシップ力」「自己理解力」「問題解決力」「職業理解力」の5つの尺度をそれぞれ6つの項目の計30項目で計測する。調査はそれぞれの質問項目に対し「どれくらいそう思うか」を4段階で示すという4件法で行った。

第1回の調査対象は新学習指導要領の対象となる第1学年普通科80名（令和4年度）を実態把握の対象とした。

②第1回実態調査の概要

実施日：2022年7月13日～22日

対象者：朝倉東高等学校普通科1年生 80人

回答者（回答率）：57名 71.25%

実施方法：Microsoft teams/Forms

③第1回実態調査の分析

表1 アンケート結果と各項目の平均値

1. 社会人としてのマナーを知っている(社)	2.69
2. 自分の考えや気持ちをうまく表現できる(リ)	2.60
3. 自分の好きなことがわかっている(自)	3.17
4. 困ったときには、どこに問題があるか見つけようとする(問)	2.92
5. いろいろな職業について知っている(職)	2.17
6. 働く上で、何を大切にしなければならないかわかっている(社)	2.48
7. 自分から積極的に話しかける(リ)	2.29
8. 自分の好きなことは、将来の職業につながっていくと思う(自)	2.88
9. よりよい解決策を見つけるために、できるだけ多くの情報を集める(問)	2.67
10. いろいろな職業について、それぞれのどのような進路をとれば、その職業につけるか知っている(職)	2.31
11. 自分が選択したことに責任を持つ(社)	3.08
12. グループ活動のときには、進んでリーダーシップをとることができる(リ)	2.06
13. 自分がどんな人生を送りたいのか、真剣に考えたことがある(自)	2.92
14. 人の意見を聞いて、それを尊重する(問)	3.29
15. いろいろな職業について、それぞれにどのような能力や知識が必要か知っている(職)	2.40
16. 周囲の状況を見て、ふさわしい言葉づかいや態度・行動をとる(社)	3.17
17. グループ活動のときに、自分から発言し、意見を述べる(リ)	2.38
18. 将来の目標がある(自)	2.94
19. やるべきことや問題があるとき、今の状況を分析する(問)	2.65
20. いろいろな職業が、それぞれ社会でどのように役立っているか知っている(職)	2.58
21. 自分の果たすべき役割に、責任を持つ(社)	3.13
22. さまざまなことに、自分から進んで取り組む(リ)	2.46
23. 自分はどんな仕事に興味があるのかわかっている(自)	2.94
24. 課題を解決するための方法を、あれこれと考える(問)	2.69
25. 将来、自分の役に立つ資格について知っている(職)	2.35
26. 約束やルールをしっかり守る(社)	3.19
27. 人に対して、自分から働きかけて、理解や協力を得る(リ)	2.60
28. これからの人生を生きる上で、自分が大切にしたいことがわかっている(自)	2.77
29. 何かを選択するときには、その結果がどうなるかを推測する(問)	2.85
30. 職業を選ぶとき、重視したいことがわかっている(職)	2.85

各項目の平均は表1の通りである。4件法での調査のため各項目の中でも平均値が2.5を下回っているものが改善を要する項目であると考えられ

る。平均値が 2.5 を下回っている項目を能力ごとに見ると、「リーダーシップ力」「職業理解力」に集中していることがわかった。さらに、アンケート結果から項目間の相関関係について分析を行ったところ「9. よりよい解決策を見つけるために、できるだけ多くの情報を集める」という項目が「10. いろいろな職業について、それぞれどのような進路をとれば、その職業につけるか知っている」「11. 自分が選択したことに責任を持つ」など計 16 の項目で相関関係が高いことがわかった。同様に「12. グループ活動のときには、進んでリーダーシップをとることができる」についても他項目とも相関関係が高いことが示された。つまり情報収集・整理、少人数グループによるグループ活動を教育活動に取り入れることで、その他のキャリアデザインに関する能力の向上が期待できると考えられる。そこで本研究では、実態調査の結果から「リーダーシップ力」の向上に焦点を当てた実践を行っていくこととした。

ここで、「リーダーシップ力」と国語科の目標との関係について整理する。実態調査における「リーダーシップ力」は一般的に言われるような、集団の先頭に立って他者を導いたり他者をマネジメントしたりするリーダーシップとは異なる。実態調査の項目にある「7. 自分から積極的に話しかける(リ)」「12. グループ活動のときには、進んでリーダーシップをとることができる(リ)」「17. グループ活動のときに、自分から発言し、意見を述べる(リ)」など、主に協働する場面における発言に関する能力を指している。これは国語科においては「伝え合う力」として育成を目指すものである。高等学校学習指導要領解説国語編では第 3 節国語科の目標「1 教科の目標」の中で「(2) 生涯にわたる社会生活における他者との関わり合いの中で伝え合う力を高め、思考力、想像力を伸ばす。」と記述されている。「伝え合う力を高める」とは「人間と人間の関係の中で、互いの立場や考えを尊重し、言語を通して的確に理解したり効果的に表現したりして、円滑に相互伝達、相互理解を進めていく力を高めること」と解説されている。これは実態調査において「リーダーシップ力」として測る「7. 自分から積極的に話しかける(リ)」や「17. グループ活動のときに、自分から発言し、意見を述べる(リ)」という項目が指すものに非常に近い能力であると考えられる。

また、これまで高等学校においてリーダーシップは体育祭や生徒会活動等の「特別活動」で育成されるだろうという教員の認識があった。集団の

中でリーダーとしての役割を担った数人の限られた生徒がさらにリーダーシップ性を伸ばしていくという、生徒個人の成長がリーダーシップの育成であると考え教員は多い。しかしながら、キャリア教育の目的は「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す」(中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」(平成 23 年 1 月 31 日)ことであり、すべての生徒に対して行われるものである。リーダーシップ力をすべての生徒が育むためには、日々の授業でキャリア教育が行われなければならない。この点から、国語科の授業におけるキャリア教育、特に「リーダーシップ力」の育成に着目することとした。

(3) キャリアデザイン力育成のための授業実践

① 単元構想表を用いた単元開発

授業の中でのキャリア教育の実施は、高等学校学習指導要領(平成 30 年告示)第 1 章総則第 5 款の 1 の(3)で「生徒が、学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を要としてつつ各教科・各科目の特質に応じて、キャリア教育の充実を図ること。」と述べられている。それに伴い作成された中学校・高等学校キャリア教育の手引き—中学校・高等学校学習指導要領(平成 29 年・30 年告示)準拠—では、特別活動(ホームルーム活動)の実践例の他に、各教科におけるキャリア教育の取り入れ方や実践例が記載されている。しかしながら周知や学校現場での活用はまだ十分とは言えず、キャリア教育の視点を取り入れた授業に課題が多い。この点に着目し、教員が単元開発をする際にキャリア教育の視点を取り入れるための手立てとして単元構想表を作成した。単元構想表は富田(2011)を参考に、さらにキャリア教育の項目を加える形で作成した。単元構想表は単元を貫く言語活動の実現に向けて考案されたものである。これを新学習指導要領に沿った形に改め、単元の中のどの部分にキャリア教育の視点を置くか可視化した。作成にあたっては、授業実施の 1 ヶ月前から教科主任をはじめ本校国語科教員にも随時単元開発の進捗状況を報告した。その際単元構想表の見方や作り方を伝え、評価規準や評価に関するルーブリック作成などにおいても情報共有することで、授業実践までのプロセスを共有した。実際に使用した単元構想表が表 2 である。

表2 単元構想表(教師用)

単元構想表 論理国語「読むこと」 単元名「ロボットは心を持つか」			学習指導要領の言語活動例から選択。				
言語活動例			ア・イ・ウ・エ・オ・他 同じ事柄について異なる論点をもつ複数の文章を読み比べ、それらを比較して論じたり批評したりする活動				
指導事項	重点化	学習活動	評価規準	留意点 他	時	キャリア教育	
知識及び技能	○	心に関する書籍に触れ、自分の考えを構築するための材料とする。	グループ討論の際に、自分の論拠として挙げることができる。	ワークシート	1-5		
思考力、判断力、表現力等	ア	文章の種類を踏まえて、内容や構成、論理の展開などを的確に捉え、論点を明確にしなが	「ロボットは心を持つか」を通読し、構成と内容を大まかに捉える。	社会の中で使われているAIやロボットについて知ること、アンドロイドについての関心を持たせる。	1		
	イ	文章の種類を踏まえて、資料との関係を把握し、内容や構成を的確に捉えること。	「人間とアンドロイド」「日本人とキリスト教」「筆者と石黒氏」という対比構造を理解する。	筆者と石黒氏の論点を整理することで、どちらの主張にも理が通っていることを確認したうえで、生徒自身の論拠を明確にさせる。	2		
	ウ	主張を支える根拠や結論を導く論拠を批判的に検討し、文章や資料の妥当性や信頼性を吟味して内容を解釈すること。	「作者の心情」を読み取るとはどういうことかについて「ロボットは心を持つか」と合わせて理解する。	「心」の捉え方が様々あることを確認しながら、筆者の論拠と主張がどこにあるか理解させる。	3		
	エ	文章の構成や論理の展開、表現の仕方について、書き手の意図との関係において多面的・多角的な視点から評価すること。	「ロボットは心はあるか」についての自分の意見をまとめる。	ワークシートに「ロボットは心はある or ない」の主張とその論拠を記入し整理させる。	4	他者が理解しやすい説明をするために、準備をすることができる。(人間関係形成力)	
	オ	関連する文章や資料を基に、書き手の立場や目的を考えながら、内容の解釈を深めること。	グループ討論を通して、「ロボットは心はあるか」について自分の意見を深める。	他者の意見をワークシートにまとめ、自分の意見との違いを明確にし、討論後に振り返る。	5	意見が異なる他者を受け入れつつ、自分の意見を他者に伝えることができる。(リーダーシップ力)	
主体的に学習に向かう態度	カ	人間、社会、自然などについて、文章の内容や解釈を多様な論点や異なる価値観と結びつけて、新たな観点から自分の考えを深めること。	設定した題材に関連する複数の文章や資料を基に、必要な情報を関連付けて自分の考えを広げたり深めたりすること。	言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚を深める。		ワークシートを評価	
この部分は学習指導要領の指導項目を記載。			単元を貫く活動課題を設定。			キャリア教育の視点での手立てを焦点化。	

これにより、単元という大きな単位での学習目標の吟味や言語活動の設定、評価規準等をスムーズに協議することができた。これは単元構想表が複数の教員で議論する際のチャートとして機能したためであると考えられる。教科内でも教材の価値や学習活動について話し合いの場を設けていても概念や理念等の抽象的な話題に偏る傾向があったが、具体的な時間数の中での評価、特にパフォーマンス課題を設定する場合の議論が細部まで成されるようになったと感じる。

単元構想表を用いて授業を実施するにあたって、生徒にも単元の流れや評価を周知するために単元構想表を簡略化したものを配布した。それが表3である。この他にも評価用ルーブリックも配布している。

表3 授業計画表(生徒用)

2年普通科(理系クラス) 論理国語 授業予定表						
【「人工知能と友だちにできるか」について討論しよう】						
日	曜日	時間	内容	活動	評価①	評価②
①	7月5日	水	1	筆者の主張をつかもう!	本文を読む	毎時間の授業の振り返りを書いたワークシート①
②	7月6日	木	6	筆者の論理を理解しよう①	本文を読む	
③	7月7日	金	5	筆者の論理を理解しよう②	本文を読む	
④	7月12日	水	1	自分の考えを作ろう!	個人作業	この時間に記入したワークシート②
⑤	7月14日	金	5	グループで討論しよう!	グループ討論	

単元構想表を用いた授業実践について国語科の教員にインタビューを実施したところ、「新学習指導要領に沿った授業展開が一目でわかるため、教員の工夫に力を注ぎやすい」「ぜひ自分自身も活用し、単元という大きい単位での授業構想を試みたい」「これまでは単元計画は公開授業のために作るものという認識があったが、評価規準の設定や学習活動、キャリア教育を焦点化することができ、授業により工夫を施すことができるだろう」という意見を聞くことができた。また、生徒も授業の目的や学習活動を事前に知られることで授業に向けての心構えができたようである。特にこの単元構想表を活用した実践授業では、パフォーマンス課題として「自分の意見を文章に書くこと」を最終目標としていたため、生徒は授業内だけでなく、日常生活からも情報収集することができたようである。

②授業内手立ての実践I

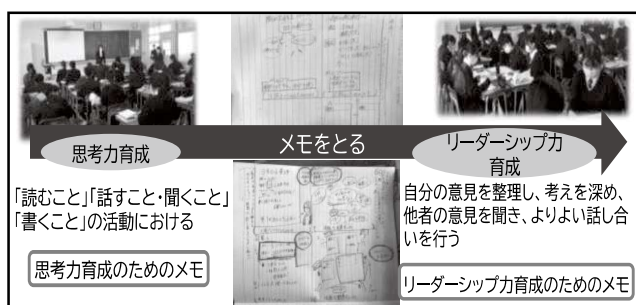
1回目の授業実践では、「リーダーシップ力」の育成を国語科の授業を通して図ることを目指し単元開発に取り組んだ。その際、生徒が自ら発言しやすくするためには、発言するための前段階となる意見を持つための手立てが必要であると考

え、単元を通して「メモをとる」という活動を設定し授業を実施した。この授業の構想に際しては、独立行政法人大学入試センターが発表した令和5年度大学入学共通テスト問題作成方針と本試験問題文を参考としている。具体的には問題作成方針の中で「高等学校における『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善のメッセージ性も考慮し、授業において生徒が学習する場面や、社会生活や日常生活の中から課題を発見し解決方法を構想する場面、資料やデータ等を基に考察する場面など、学習の過程を意識した問題設定を重視する。」と述べられている。その方針をもとに作成された本試験では第2問の中で、本文の理解を深めるために提示された資料をもとに作成した構想メモに関する問題が出題されている。この問題は学習段階において、考えの形成のためのプロセスを構築する力が問われているものであり、従来の受験指導では育成できない、一貫した言語活動や単元という大きなまとまりでの学習活動によって育成される思考力である。

以上の、生徒が集団の中で発言をするための準備段階としてのメモ作成と、生徒が思考力を働かせるためのメモ作成という2つの観点から、メモ作成を一貫して取り入れた授業を構想し、実践した。

対象は実態調査の対象である第1学年普通科80名を対象とした。国語科の必修科目である「現代の国語」において、「人と自然の共生とはどういうことか」という河合雅雄氏の教材を用い「メモを味方につけよう」という単元で授業を行った。学習目標は、評論の内容読解を通して筆者の主張に対する自己の考えの形成を行うことに定めた。まず、生徒に自己のメモの取り方をメタ認知させ、メモを用いた要点整理を行い、主張を理解する学習を実施した。その後メモを振り返りながら自己の考えを形成しつつ、グループ協議の際に発言する内容の整理や他者の意見を聞く際にもメモを取る学習を行った。

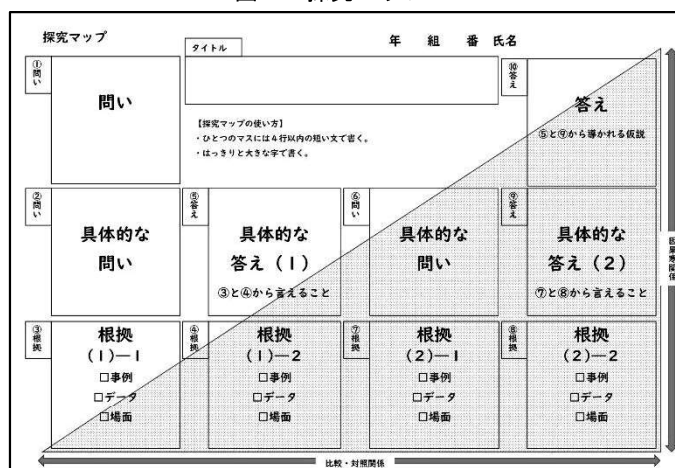
図1 メモを取り入れた授業構想



③授業内手立ての実践Ⅱ

2回目の授業実践では、探究マップの活用に取り組んだ。実態調査においてリーダーシップ力の中の「22.さまざまなことに、自分から進んで取り組む(リ)」という項目に課題が見られたため、生徒が教師の指示のみで学習に取り組むのではなく、生徒自らが問いを立て答えを考えるという学習活動を目指して探究マップを取り入れた。探究マップは、齋藤(2011)が開発した思考ツールであり、「問い」から「根拠」を経由して「答え」へとつなげるためのものである。従来は論文作成のために用いられたものであるが、国語科の授業において評論文の内容理解にも活用することができる。探究マップを活用することで、これまで教師の発問に生徒が答えるという教師主導であった授業から、生徒が自ら「問い」を立て、「答え」につながるよう「根拠」を探しながら自分で考えるという授業体制への変換を試みた。

図2 探究マップ



実践は1回目の実践対象であった第2学年普通科80名を継続して対象とした。国語科の選択科目である論理国語において、主張をもとに問いを立て、筆者の論を推測することを学習目標に定め授業実践を行った。

まず探究マップについての説明を行い、いくつかの評論文を用いて演習を実施した。筆者の主張をつかんだ時点で、探究マップ(図2)の「答え」に主張を書き込み、「答え」を導くためにはどのような問いが妥当であるか考える、という学習活動を繰り返した。主張の根拠となる事例やデータが、どのような「問い」のもとに引用されているか、筆者が持つ課題感は何なのかを考えることで、生徒自身に社会現象や自然科学に対する課題意識を持たせ、自ら課題解決に動くための原動力の育成を図った。

7 全体考察

(1) 実態調査の分析

第1回の実態調査ののち授業実践を経て、第2回・第3回と生徒を対象に実態調査を行った。前年度は第1学年普通科80名が調査対象であったため、継続して第2学年普通科80名を引き続き調査対象とした。調査項目や調査方法は第1回と同様、改訂版キャリアデザイン力アンケート（高校生版）を用いた。

実態調査の結果を、実践において焦点化した「リーダーシップ力」の観点から分析を行った。

表4は「リーダーシップ力」に関する項目であり、実態調査の結果をグラフ化したものが図3である。

表4 実態調査質問項目（抜粋）

第1回の調査で課題が見られた項目
7. 自分から積極的に話しかける
12. グループ活動のときには、進んでリーダーシップをとることができる
17. グループ活動のときに、自分から発言し、意見を述べる
22. さまざまなことに、自分から進んで取り組む

図3 実態調査結果

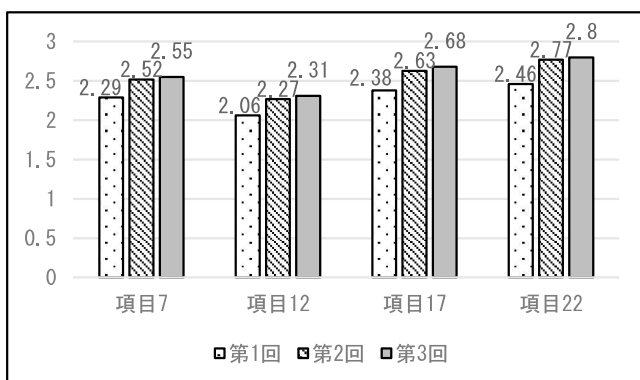


表5 実態調査の概要

	実施日	回答率	実施方法
第1回	R4年7月13日	71.25%	Microsoft Teams/Form
第2回	R4年11月4日	70%	
第3回	R5年7月19日	96.25%	

項目7の「自分から積極的に話しかける」においては、第1回から最終調査までで0.26ptの上昇が見られる。第1回の実態調査が1学年7月であったことを踏まえると、生徒の人間関係の変化が実態調査に少なからず影響していることは否定できない。しかしながら、一斉授業に偏りがちな高等学校の授業において、単元構想の段階からグループワークを設定し、単元のどの段階にグループワークがあるのかを生徒とも共有したことは一

定の成果があったと考えられるだろう。

同様に項目12「グループ活動のときには、進んでリーダーシップをとることができる」においても、0.25ptの上昇が見られた。教科内のキャリア教育において、漠然とグループ活動やディベートを長時間行うことは教科の目標の達成を阻害しかねない。その点を、単元構想表を用いてキャリア教育に関する活動を焦点化することに成功した。項目12「グループのときには、進んでリーダーシップをとることができる」の変容はその結果と言えるだろう。

さらに項目17「グループ活動のときに、自分から発言し、意見を述べる」に関しては0.30ptの上昇が見られた。意見を述べるための「考えの形成」において国語科は大きな役割を担っている。情報を収集・整理したり、比較したりすることで自分だけの観点を見つけ、考えを形成する力の育成が求められているが、教授法や学習の具体は明らかにされていない。今回の授業実践において考えを形成し意見を述べるための手立てとしてメモに着目したことで、実態調査の数値上は一定の成果があったと考えられる。しかし考えを形成する力の育成は一度の授業で成し遂げられるものではないとも感じる。今回の授業実践で終わるのではなく、継続的網羅的指導が必要である。

項目22「さまざまなことに、自分から発言し、意見を述べる」においては、0.34ptの上昇が見られた。探究マップを取り入れた授業実践でこの項目の改善を図ったが、授業中はこの実践が最も積極的に取り組む生徒の姿が見られた。これまでの評論文を教材とした授業では、内容理解がメインとなることが多く、知識伝達に偏りがちであった。そのため生徒は授業者から提示された問いに答える、という受動的な思考をせざるを得ない状況であった。しかし探究マップを取り入れたことによって、生徒が筆者の論理を予測しながら読んだり、論理の妥当性を評価したりすることが可能となった。実践授業では演習を重ねるたびに生徒が自主的に探究マップに書き込むようになり、授業者の説明する時間を大幅に短縮することができた。これはまさに生徒が「自ら進んで取り組む」姿そのものであり、リーダーシップ力育成のための大きな足掛かりとなった。

リーダーシップ力育成に焦点を定め、様々な手立てを講じてきたが、それぞれに一定の成果を見ることができた。また、今回の実践に限らず、リーダーシップ力に関しては生徒自身の日頃の学校生活の成果、先生方の日々の授業の賜物であり、

実態調査の結果から本校の教育活動が生徒の能力の向上に大きく貢献していることが確かなものとなった。

(2) 本校国語科教員からの評価

本校での授業実践では授業の構想段階から国語科の先生方に情報共有し、その都度意見を収集した。単元構想表の作成に関しては、観点別評価のためのルーブリックも合わせて共有した。これまで授業について教員間で議論する際には、教員の個々の理念に依るところが多く授業の具体が共有されにくい現状があった。しかし単元構想表を用いることで、学習目標をはじめ言語活動や単元の時間数、評価規準や毎時間の授業者の留意点まで可視化できるため、教員間の議論がより充実したものとなった。本校の国語科の先生方には単元構想表について非常に好評を得ており、「自分も授業に取り入れたい」「学習指導要領との関係性をより意識しやすくなった」という意見を聞くことができた。

また、メモを用いた授業に関しては、共通テストとの関連性を示し教員間の理解を図った。受験指導として問題に取り組む以前に、言語活動を活用した考えの形成を積み重ねておく必要があることを、授業改善の意図が作問に反映されていることを共有することができた。授業改善が進路保証と密接に結びついていることを職員間で改めて認識することができたと感じる。

2 学年の国語科の先生方からは、探究マップと「総合的な探究の時間」の関連性の高さを評価していただくことができた。生徒が自ら課題を設定するためには、社会や自然、人生におけるあらゆる物事に対して問いを立てることができなければならない。問いを立てる経験を国語科の授業で積むことができれば、「総合的な探究の時間」でも応用が可能であり、より充実した学習ができる。今回の実践では探究マップを取り入れた授業と「総合的な探究の時間」での課題設定のタイミングが重なり、相互に学習を活用することができた。カリキュラムを設計する段階で、教科横断的に計画を立てることができれば、より充実した学習が実施できるだろう。

国語科の先生方からの個々の手立てと実践への評価はおおむね好評であり、応用や活用への意欲も聞くことができた。また、教科の中で行うキャリア教育の在り方や目標についても理解を得ることができた。受験指導や就職支援だけがキャリア教育ではないこと、生徒が生涯にわたってキャリアを構築するための力を育成することがキャリア

教育であることなど、キャリア教育の理念の部分を共通認識として持つことができたのは、本研究の大きな成果であると考ええる。

8 成果と課題

【成果】

○キャリア教育の理念に基づいて本校生徒のキャリア形成に関する課題を、教科の視点から検討・共有することができた。

○キャリア教育の視点を取り入れた単元開発を実施することで、本校生徒の課題であった「リーダーシップ力」の育成に取り組むことができた。

○キャリア教育の視点を入れた単元構想表を開発し、利便性を教科内で共有できた。

【課題】

○単元構想表の作成方法についてより簡易的、汎用的なものを考案し、教科内に普及させる。

○年間指導計画の段階で、キャリア教育の視点を取り入れ、網羅的にキャリアデザイン力を育成するために教科内の連携を行う。また、そのための計画案を検討する。

引用文献・参考文献

- ・中央教育審議 (2011) 「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」(答申)
- ・三川俊樹・石田典子・神田正恵・山口直子 (2017) 「高等学校におけるキャリア教育職業教育の効果に関する研究」追手門学院大学心理学部紀要第 11 巻 p. 34-48
- ・文部科学省 (2004) キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書
- ・文部科学省 (2011) 高等学校キャリア教育の手引き
- ・中央教育審議会 (2017) 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」(答申)
- ・富田哲也 2011 『“単元構想表”でつくる! 中学校新国語科授業 START BOOK 第 1 学年』明示図書
- ・Grant Winggins 2012 『理解をもたらすカリキュラム設計—「逆向き設計」の理論と方法』

謝辞

本研究をまとめるにあたり、研修機会を与えていただき、ご支援いただいた福岡県教育委員会に心より感謝を申し上げます。また、在籍校の校長先生をはじめ、関係の諸先生方に多大なるご協力をいただきましたことを深く感謝申し上げ、謝辞といたします。